

## はじめに

2011年3月11日の東日本大震災による津波と福島第一原発事故によって、日本はかつてない危機に陥っています。特に原発事故は、われわれの健康、とりわけ子どもたちや若い命の未来に深刻な脅威を与え、生存の基盤である大気や大地、水などの環境をいまでも汚染しつづけています。そして、今後長期にわたって深刻な被害が予想されるのが、安全・安心を誇っていた日本の農業です。このどん底からの再起は、単なる「復旧」や「復興」ではなく、新たな日本の「再生」でなければなりません。この危機を新たな日本再生の好機ととらえ、われわれの食料や農業の基盤から日本の未来図と行動のあり方を考えていこうと企画されたのが、今回の循環ワーカー養成講座『日本再生と農業』です。したがって、アプローチの方法も講師陣も通常の「農業論」とは異なるものでした。

講座の皮切りは、もったいない学会会長の石井吉徳氏に、「石油ピークと立体農業—3.11からの視点」と題して、エネルギー問題との関連で農業を語っていただきました。石油ピークは食料のピーク、文明のピークであり、エネルギーの質の問題が強調されました。

続く日本大学生物資源科学部糸長浩司教授には、「原発事故被災農村から未来のシナリオを考える」と題して、パーマカルチャー、エコビレッジの実践を進めてきた飯舘村の村民が放射能によって故郷を失うことになった状況を語っていただきました。

「キューバに学ぶ日本の農業と防災力」というテーマでご講演いただいたキューバ有機農業研究者の吉田太郎氏からは、北朝鮮のキム・ジョンイル、キューバのフィデル・カストロ、日本の東条英機の共通点が、ピーク・オイルを経験したことであると興味深い指摘がありました。また、持続可能な農業や防災と関連する「レジリエンス」の概念をご紹介します。

大地を守る会の藤田和芳氏には「大地を守るソーシャルビジネス」と題して、大地を守る会の成り立ちから脱原発運動、有機農業の推進、NGOと株式会社の統合、社会的企業、ソーシャルビジネスとしての国際展開までの経緯とビジョンをうかがいました。

株式会社ユーグレナ代表取締役出雲充氏の「ミドリムシは地球を救う！」では、動物であり植物でもあるミドリムシ（学名ユーグレナ）を大量培養し、高栄養価食品とジェット燃料を生産するというユニークな夢が語られました。

そして、国学院大学大学院古沢広祐教授には、「グローバリズムと日本の食・農・環境」と題して、TPP問題も含めて世界の環境・農業・食料をめぐるパラダイム対立について整理していただき、オルタナティブな日本と世界の未来について示唆をいただきました。

最後になりましたが、講師の方々、ご後援をいただいた環境省、中央区、ご協賛いただいた企業の方々に心から感謝申し上げます。

2012年3月

NPO 法人 循環型社会研究会 事務局担当理事 久米谷 弘光